

ラウンドテーブル **唄者が語るシマウタの過去・現在・未来**

唄者：坪山 豊  
 川本栄昇  
 泉 茂光  
 川畑さおり  
 司会：梁川英俊

梁川：それでは第二部を始めたいと思います。第二部は「唄者が語るシマウタの過去・現在・未来」と題して、唄者の方にご自分の活動や経験を語っていただきながら、シマウタの来し方行く末について考えてみようという企画です。

出席者は、まず奄美大島から坪山豊さん、それから鹿児島在住の唄者としてお三方、まず徳之島出身の川本栄昇さん、喜界島出身の泉茂光さん、同じく喜界島出身の川畑さおりさんです。まずお一人ずつ15分から20分くらいお話しいただき、その後で30分ほどフロアの方々と一緒に質問や討論の時間を設けたいと思っております。

それでは、時間も限られていますので、早速坪山さんからお話しいただければと思います。坪山さんと言えば、シマウタの代名詞のような方ですので、たぶんとても興味深いお話を聴かせていただけるのではないかと思います。それでは、よろしくお願ひします。

坪山：はい。話も下手ですけれども、それはあっち置いて聞いてください。奄美シマウタの、今日、「しまうたの未来」ということですね。未来ということは、現在があって過去がある。そういうことで、私はシマウタがいつ頃うたわれ始めたのか、これはほとんどはつきりしないと思います。私は、小さい頃に、いろんな悔やみとか行事を見てきました。そのときに、悔やみ、昔の人が「シマウタや悔やみウタよ」と方言で、こういうことをしょっちゅう言っておりました。そこで、悔やみ、悔やみウタとは何だろうと思ったときに、小さいときから悔やみの場ですね、本当に身内をはじめ、私は宇検村ですが、宇検村各地から集まった親戚、身内が大声で泣き叫ぶと、そのときに、その土地の訛りとかイントネーションとか、本当にいろいろなんです。それが一緒に泣くと、本当にシマウタのように聞こえた、そういうことですね。それでやっぱり、民謡、シマウタは、悔やみからだなあというのも考えますし、それから、どうしても人間って働くと掛け声が自然と出てきます。実は私も船大工なんで、船大工しながら何気なく夢中になるとシマウタが出てくる。そういうふうにして昔のいろんな作業の掛け声から、シマウタが生まれたんじゃないかなとも思われる。これはいつだということはわかりません。そこで私、シマウタをうたいますとですね、よくお年寄りの方が「あんたは本当のウタをうたわないといけないよ」と、こういう言葉を何度も聞きました。ところが本当のウタはどのウタだろうと、私、逆に質問したことがあります。「じゃあ、本当のウタをうたってください」と、「聞かしてください」というふうにしたところが、その相手のほうも、ウタを知らなくてですね、そういうもんですから、シマウタっていうのは本当に自由に、その人その人が自由にウタをうたうっていうのが、シマウタだと思います。

そこで奄美シマウタを大きく分けると、カサン唄とヒギヤ唄と、これは奄美本島内なんです。で、徳之島、沖永良部となると違いますけれども、北大島をカサン、南大島をヒギヤと申しますが、やっぱり、ヒギヤ唄とカサン唄の違いはたくさんあります。で、私がシマウタを始めた頃は本当にはっきりしていました。これはカサン唄だ、これはヒギヤ唄だという。ヒギヤというのは奄美を半分に分けた南の方です。はい、そういうことです。そして最近はずいぶん、なかなかそれが区別がつかないウタも多々ありますよ。やっぱりそういうふうにいるような交通の便とか、そういうのが便利になってきてですね、会話する、北と南が会話する機会も多くなった。これも影響だと思います。そして北大島のカサン節というのは、やっぱり環境に左右されると思いますが、延々とうたわれている。その反面、ヒギヤ唄、南大島となると山あり谷あり海ありですね、本当に曲がりくねった点があると、抑揚が多いと、そういう点は違います。それも最近はずいぶん似て、近づいてきました。そういうことでこれが過去のウタだからですね、現在のウタに移った時点、私はこう思います。昭和30年頃に瀬戸内町の出身で武下和平という、百年に一人という名人がいました。このウタが凄くいいウタなんで、誰にでも受ける、そういうウタなんで全部がこのウタをうたう、練習しようというふうな気運が始まったんです。そして南大島の人たちすべてが、武下和平のウタだろうと思われまます。そういうことで武下節がうたい始めた頃に、いろんなウタのアレンジ、古いシマウタが相当アレンジした、そういうことは大衆受けしだしたということですね。で、昔のウタというのは本当に素朴で、自分が楽しむ、自分が楽しめばいいかという、私も今でもそうですけども、その時点で歌遊びというのがだんだん少なくなってきました。だんだん、そして歌遊びのなかでは本当によほど上手くないとうたえないということで、歌遊びは少なくなった次第です。そして、それからだんだんだんだんいいますが、昭和47年に民謡大会というのがありましてですね、それが民謡大会、コンクールの始まりだと思いますけれども、それからだんだんだんだん広い、大きなコンクールという民謡大会が毎年出ました。それで、これは奄美のセントラル楽器さんと南海日日新聞社の共催ですけども、最近はずいぶん南海日日新聞社主催でやっております。で、そこでこれに合格するために、全部のウタが変になってきた。これはコンクールが悪いというんじゃないんです。コンクールがあったおかげで、奄美シマウタがどんどんどんどん増えだした、ということで、いいのと反面ありますが、おかげでいろんな若者の唄者が出ました。その唄者たちの唄というのは、延々と引っ張る。で、これが相当変わってきております。そしてなかには若い、少年たちがシマグチを知らないでシマウタをうたう、シマウタ、ウタにある言葉だけを習ってシマウタをうたう。そうすると旋律だけがウタになってしまって、内容というのはもう億劫になってきている。そこでシマグチの大事さというのを考えますけれども。

この辺でですね、武下和平さんのウタに移った頃、そしてそれまでに加計呂麻とか瀬戸内町でうたっていたウタを、ちょっと実験してみます。で、これは大体私、シマウタを始めて二年目、三年目にこちらの小川(学夫)先生に引率されてですね、神戸、北部関西の民謡大会に行ったんですけれども、そのときに神戸で、二次の宴会がありました。そこで瀬戸内町実久出身の、あのとき70歳ぐらいのおばさん、私が44、5、6のときですか、今100歳になります。これがしまで12、3歳頃にうたっていた「朝花節」、ちょっと聴いてください。

「稀まれ汝なきうがゃなま 挿うがめばや、いつ頃挿なまむかや」と、この古いのをひとつ、

で、後で新しい現代ふうの、歌詞は同じでうたってみたいと思います。

(古い「朝花節」の演奏)

これがですね、その頃までのヒギヤ節なんです。で、そこで昭和30年頃から変わりだしたウタがこういうたです。最初のウタは「ハレー」という言葉がありません。「ヨハレ」とちょっと言っただけです。で、今度のウタは「ハレー」としょっちゅう言っています。その変わり、旋律の違い。時間がありますと奄美、6種類ぐらいウタがありますけれどもそこまですると。(笑)

(現在の「朝花節」の演奏)

はい、これだけ変わります。こうなると普通の歌遊びじゃ、うたにくいですよ。それで、歌遊びがなくなった。そしていろんな、テレビとかですね、娯楽がだんだん広くなってきて、放っとかされてきたっていうのが奄美シマウタなんで、最近ではコンクールとかありましてどんどんどんどん盛んになりました。若者が出て、そしてメジャーにも何名か行っています。そういうことで、ですけれどもですね、今うたわれている長つたらしいシマウタが、本当のウタと思われちゃ困るんです。はい。そこを訴えたいんですけれども。で、こうなると、もういつかは本来のシマウタが、なくなっていくんじゃないかなとそういう恐れが自分のなかにあります。そこで、これからということですね、これからは私たちは、どういうふうにしたらいいかということで、私はまず、子ども、3歳、4歳の子どもから小学校、中学校、そういう子どもたちに、シマウタというものを教えるのが大事だと思います。そうしていくと、やっぱり、いろんな事情を話しながらですね、先人たちがつくってくれたシマウタを、奄美のすばらしいシマウタを、子どもたち、皆さん全部でやりましょうよと、こういう誘いをしますと、学校とか幼稚園の歌っているのは、普通は大和の歌ですよ。それに、そのうちシマウタがポンと入ると、すごく興味を持ってくれます。そこで私はシマウタのなかに2、3曲うたいやすいのを選び、そしてわらべうたを、昔のわらべうたをうたわせるという、そういうふうになりますと、最初のうちはなかなかご父兄の方が納得しなかったんですよ。子どもたちは本当にやろうという気があってですね、だんだんだんだん説得するうちに、最近ではご父兄の方も協力している。そういうことで今、どんどんはやっております。そこで言葉のですけれども、ウタのなかの言葉っていうのは本当にシマグチですが、子どもたちのシマグチというのはなかなか、なかなか教えると覚えが速いです。使うのはちょっとおかしいんですけれども、それをどんだんやっっていけば、必ず島の「しまうたの未来」も拓けるんじゃないかと思います。そしてできましたならば、これから先ですね学校教育のなかで、今の大学でもそうだと思いますけれども、洋楽の音楽を音楽だと、クラシックを音楽だと思込ませる教育は今までありましたよね。で、これからはですね、そうじゃなくして地域の音楽を徹底的に教えると、これが大事だと思います。そこで学校の先生方にぜひ、教育のなかで、島の音楽をちょっとでも取り入れてくだされば、将来は本当に明るくなると思います。私、以上です。ありがとうございました。

**梁川：**どうもありがとうございました。限られた時間のなかで、重要な点だけをポンと取り出して見せてくださったような、大変興味深いお話でした。

では、次に川本榮昇さんにお話しいただきたいと思います。川本さんは唄者としての活動はもとより、シマウタを教える教育活動の方にも携わっていらっしゃるようで、大学などでも教えておられます。そうしたお話も含めて、シマウタとの出会いや現在のご

活動などについてお話しただけなのではないかと思います。それでは、よろしく願いいたします。

**川本：**よろしく願いします。先ほど紹介されました徳之島出身でございますので、徳之島の方の民謡とかかわりでお話をしたいと思います。本島の方はただ今、坪山さんの方からお話がありましたので、私は徳之島の方を話したいと思います。

まず、シマウタとの出会いということですが、徳之島にはですね、あまり民謡、まあ、いっぱいありますけども、多くの子供時代ですか、あまりシマウタというのは興味もなかったし、また聴いたこともないんです。ただ祖父がですね、唄者がおりました、いろんなお祝いに呼ばれて、うたっておりましたけども、徳之島の場合は奄美のシマウタと違って沖縄に近いということもありまして、まず最初にうたうのは「御前風」というのを徳之島はうたって、これが始まりで「御前風」をやって、それから「意見口説」という、こういうのをうたって後は沖縄民謡に入ると、そういうウタしか徳之島の方は、徳之島の方でも特に伊仙町は、沖縄の方に近いというせいもありましてですね、ほとんどそういう沖縄系統のウタが多いと、しかしそのなかにまだ喜念というところには、またいろんな徳之島民謡をうたう方々がたくさんいらっしゃいます。先ほど八月踊りというものもありましたけれども喜念にはまた有名な七月踊りという、踊りもあります。で、そういう関係で、私は小さいときはあまり民謡に興味がなくて、ただ聴いていただけと。

で、それですね、私は昭和29年、復帰すぐです、大阪の方に行きまして、まだ二十歳になってなかったですけども、向こうで仕事しながらですね、何となくですね、シマウタとかレコード、先ほどお話がありましたように武下和平さんのレコードですね、どこで買ったのかちょっと覚えてないんですけども、買ってきまして、その当時はですね、われわれ奄美の人間と韓国ですね、一番嫌いおったんです。われわれがシマウタをうたうということは絶対できなかったです。その当時はそれでレコードを買ってきて、私は晩、仕事が終わってから、布団をかぶってですね、そこで武下さんのウタを聴いたことがある。それはただ聴くだけで、自分で覚えようとか、そういうのはその当時はなかったです。それからですね、昭和40年ですか、仕事の都合もありまして鹿児島の方に引き揚げてきて、鹿児島で生活をするようになりました。その時にもですね、ちょうど武下和平さんのグループが、「うぐいす会」というのがありまして、それを聴きましてですね、それからが僕のシマウタの始まりですけども、「あいやー、これはいい」と、なんとかこのシマウタを稽古したいということで、お願いをしてそのクラブに入ったんです。それで5、6年ですかね一応入って稽古をしまして、それからもう自分でいろいろ勉強をしながらうたうようになりましてけども、そのときに初めての奄美の民謡というのを覚えたのが40過ぎてからです。それからいろいろと勉強もしましたし、いろいろやってるうちにですね、何年ぐらいしてからですかね、ここにいらっしゃいますけれども小川先生という方と出会いました。それから坪山さんとも出会いました。それで、いろんなイベントというものに出していただいて、そのときに付き合っている小川先生の方から、どうだと、ひとつ吹き込んでみないかということですね、その代り条件がありました。徳之島民謡を必ず入れてくれと、いうことでしたけれども、私はその当時は徳之島民謡はひとつもうたえなかった。それで研究してくれるんであったら、研究しようと思いました。で、一生懸命勉強して、一年ぐらいしてからですかね、小川先

生が、じゃあぼちぼちやってみましょうかということで、昭和何年でしたかね、吹き込んで発売するようになったんです。そのときに初めて、私が民謡を稽古して、テープで出して、やったというのも、これは小川先生、坪山さんのおかげだったと思っております。また小川先生は、また奄美の民謡に対しては大変貢献された方で、この人が世に奄美のシマウタを出した方だといえると思うんです。いろいろと教えていただきました。

それからですね、教室を持っておりますけれども、私はあまり教室というても、そこまで教える力はありませんでしたし、どうしようかと思ったか、どこで聞いたかですね、次から次、教えてくれということで、あまり来られるものですから、これは何とかせんにゃいかんかと思って、まず最初に来てやった子が非常に熱心な子であって、それから二人三人と入って、それで家が狭いもんですから、他の人はいれなくてですね、稽古をして、家で教えるようにして、やっておりましたけども、次から次にお願ひしますということで、じゃあ公民館でも借りてやりましょうということで、今現在は公民館を借りて教えております。今、小さい子で何歳でしたかね、あの子、5歳ですか。姉妹3人、この子たちはですね、島の子じゃないんです。鹿児島の方の子で、お父さんが警察官でしたかね。徳之島の方におりまして、そのときに徳之島の方でシマウタを稽古をして、それで鹿児島にお父さんが転勤になって来たということで、子どもたちは、もう大好きで、何とかしてほしいという島からの連絡がありましたので、今、一生懸命教えてる、また非常に上手なんです。三味線も弾くしですね、お姉さんが弾き語り、非常に上手い子どもになっております。ただ残念なのは、鹿児島にいる、島出身のお父さんの子どもたちが一人もいないということです。鹿児島、島と違ってはですね、鹿児島では一世、二世、三世とおりますけども、自分が民謡をあまり知らないものですから、子どもにまで教えようとか、教えてもらいたいとかいう気持ちがないと思うんですよね。ですから、そういう子どもが一人もいないと。それで今、教室で14、5名しかおりませんけれども、島出身といっても、純島で生まれた人というのはそういません。昔で両親が島の出身であるとか、そういう人なんかの子どもさんですか、そういった人とか、それから自分が民謡が大好きだからひとつ教えてくださいと、いうことで今、教えておりますけれども、民謡を教えるというのは三味線を教えてくれという方がよくいらっしやいますけれども、私は三味線は教えませんと、シマウタを教えるから、シマウタを教えないと三味線は弾けないよという。僕は勝手にそういうふうな解釈をしているといいます。ウタが知らないのに三味線のどうして弾けるかということですね。まず、入ったらジャミをやることは、お稽古しながら三味線を稽古していくと、いうふうな教え方、それと先ほど坪山さんの方からお話がありましたように、ウタはいろいろそのシマの集落によって、うたい方が違いますから、僕は、各自、自分の好きなうたを教えております。こっちで、このウタは、こう、うたいなさいとかいう強制はしておりません。何であろうとも、自分がこのウタが好きだというウタをですね、お互いにうたって欲しいということで、それを一生懸命教えております。

あと、教室の歌遊びでも、島の歌遊びに匹敵するんじゃないかと言われることもありますが、教室でウタをやっているのは、島の歌遊びには入らないと思いますけど、どうですか。

坪山：入りません。

川本：そういうことで僕も、おそらくこれは、個人個人うたっている、ただ、唄者が集まってる所、ウタが好きな人が集まってするのは歌遊びでしょうけれども、教室で教えるのは、歌遊びということはいえないと思います。

それからですね、楽譜を使っているかどうかと訊かれることもあるのですが、楽譜といますか、島の友達から取り寄せて、初めての方々にそういうふうなものは渡しておりますけども、私は全くそういうのを見てわかりませんし、また自分も使わないもんですから、われわれはただ、聴いて、見て、それで覚えて、したものですから、譜というのはあんまり、私は薦めたくないんですけども、今頃の子どもはですね、それをまた簡単に、すぐに覚えるんですね。それは不思議なんです。僕は自分ができないもんですから。子どもさんていうのは速いんだなという、そういう感じております。それでも、最近はまだ、一応、弾き込みさえ覚えればですね、後は教えていくのは簡単なんですよね。ただ問題は、先ほどから話がありますように、シマの言葉の発声ね。発音がなかなかできないと。で、今、奄美でも民謡大会、毎年、違っておりますけれども、その人たちは非常に声が出て、非常にうたい方もいいですけども、やっぱり歌詞の発音というのは、なかなか出しにくいと、出てないと、いうのが実状じゃないかと思います。ですから、今、島でも、われわれの小さい時は、方言を使ったら先生に怒られたです。で、今はですね、その子どもたちが、シマの方言ができないんですね。それで方言を教える先生もいるという話を聞いております。ですから、シマウタをやっぱり伝承していくということになれば、やはり、シマ言、シマグチをですね、シマの言葉をやっぱり何とか覚えていけば、シマウタも上手になるだろうし、またこういう、シマ言葉、シマユムタというものを教えるにはやっぱり、親御さんですね、やっぱり教えていかなければ、子どもたちだけではできないと思いますが、そういう勉強もしてもらって、シマウタというのをうたっていけば、続けて、伝承できるんじゃないかと思っております。

それから生活のなかにですね、歌遊び、どうのこうのということもありますけれども、それは先ほど言いましたように、自分で仕事をしながら口ずさむときもありますし、女性の方の唄者なんかは機織りをしながらうたう、あるいは炊事をしながらうたうという、たくさんいらっしゃると思います。だからそういう、シマウタというのは、仕事しながらそう口ずさむというの、男性より女性の方は、それがひとつのウタの楽しみじゃないかと思います。ですからやっぱり、島の方は、島出身の方は、そういう機織りしながら、炊事をしながらでもシマグチを、シマウタをですね、ちゃんと覚えていただければ、口ずさんでいただければ、癒しにもなると思います。

島から離れてですね、それがウタにどんな影響を与えているかと尋ねられることもありますが、もうこれは何回も言いますが、帰って変わったというと、われわれの昔の小さい時の島の風景というのが、全くありませんね。今は。もう全く変わっております。私がおりました当時は、それこそテレビもない、ラジオもない、車もない、ガスもないですね。で、道路も舗装されているわけでもありませんし、砂糖を牛に牽かして港まで持っていかう、そういう時代でしたから、今、帰ってみますとですね、もう徳之島の新民謡に「徳之島小唄」とあります。「周り二十四里」という歌詞がありますけども、今、周りは15里ぐらいです。24里ありません。道路ができて、枝橋ができて、もう一時間もあれば一周できますから。それぐらい島は変わっていると。それと、先ほど申しましたように、島の子どもが方言ができないと。島へ帰って小さい子どもたちが、島の言葉で話してるのは、一人もおられません。もう全部、標準語で話しておりますので、

やっぱりこういう子どもたちが、やっぱりシマは、シマの言葉というのは忘れずに、ウタもそうですけども、ただ、シマの言葉、シマグチというのを消さないで、継承していったらいいと、私はそう思いました。以上です。

**梁川：**どうもありがとうございました。教育活動のお話を中心に、多方面の事柄について興味深いお話をいただきました。本当にありがとうございました。

次に、泉茂光さんにお話しいただきたいんですけども、実は今回のシンポジウムで、私がどの唄者の方にいらしていただくかと考えたときに、最も配慮したのが年齢構成だったんです。たぶんそれぞれの世代でそれぞれのシマウタ観があるだろうという思いから、できるだけ幅広い年齢層からお呼びできればと考えていました。それで、泉茂光さんはそのなかでおそらくもっとも唄者の数が少ない40代の代表として来ていただいております。そういうわけで、坪山さんや川本さんとはまた別の観点からお話を伺えるのではないかと期待しております。それでは、泉さん、まずシマウタとの出会いと、それからいまだどんな活動をしていらっしゃるかということについて、お話しただけないでしょうか。

**泉：**みなさん、こんにちは。泉と申します。喜界島出身ですけども、島を離れてもう約30年ですね。年がばれちゃいますけれども。なかなかこう口べたなもので、こういう会でしゃべるといのは生まれて初めてです。そんなわけで、ほくのシマウタに入った出会いというのはですね、ほくは喜界島ですけどもね、小さいときからウタは耳にしていました。うちのお袋さんは加計呂麻の人でございます。それで、ほくの姉さんがいまして、小さいときからうたっていたわけですけどもね、ほくの方は、さっきあの先輩も言われましたけれども、シマウタには全然興味なかったです。興味なくても、やっぱり耳にすんなり入ってくるんですね、ウタってというのはね。それを記憶に呼び出しながら、現在もやっているんですけども。まあ、ほくの方は、たまたまこの前、まあ4、5年くらい前ですかね、田舎でほくの親父の法事がありまして、島に帰りまして、たまたま姉さんが、ジャミをもってきていて、法事が終わった後にですね、シマウタをうたったんですけども、「ああ、シマウタもいいな」とそんな感じをもちまして。ほくはいま鹿児島にいますけれども、帰ってきて、ほくも45になりますけれども、あのやりだしたのが45ですよ、現在もう40……来年が49ですね。45から始めまして、そのきっかけというのが、田舎に帰って姉さんがやるのを聴いたのと、えー、昔、小さいながらに、お袋さんやお姉さんがうたっていたウタを聴きながら育ってきて、こうして45になって、「やっぱり島はいいな」「島に帰ったらいいよ」「シマウタはいいよ」と、いままで全然興味がなかった人が、がらっと変わっちゃったんですね。それで、ほくは45のときにちょっと転職したものですから、それからちょっと悩みつつやっていたところに、うちの女房がですね、仕事から帰ってきたときに、「ねえねえねえねえ、これ見て見て」と言うんで、「何かな」と思うと、これが蛇味線ですよ。それこそ、質流れ品で、質屋にあって、あちこち回った質流れ品の蛇味。ほくいまもっていますけれども、沖縄蛇味でした。それを皮を張り替えて、奄美の皮を張り替えて、それもね、うちの女房のおかげだと思っています。それから、こうシマウタに入っていくわけですけども、というのも、ほくはいま鹿児島に住んでいるわけですけども、民謡を習っているところがありまして、武下流の同好会に入っています。それが月三回ですね、新屋敷の方の自治会

館というところがありますけれども、そこに入りまして、まあ現在も入っておりますけれども、なかなか初めはとっつきにくくて、三味線の方は何とかスムーズにいくんですけども、なかなかウタというのがうまく入れなくて、悩みつつも現在までやってきたということなんです。えー、ぼくのお姉さんというのが、みなさんよくご存じだと思うんですけど、あ、若い方はご存じないかもしれないですね、あの奄美大島でですね、NHKの「ふるさと歌祭り」っていうのがあったんですね。ぼくが小学5年生頃かな、姉さんが中学生の頃でしたから。その頃に奄美大島で司会をやっていた宮田輝さんがいらしてですね、そこで喜界島代表で「行きゅんにゃ加那」をうたったのが、ぼくは強烈に印象に残っていて、すごくインパクトがあったんですけどね。それから姉さんは東京に上るんですけども、なかなか東京で民謡をやるきっかけがなかったところに、たまたま武下和平の東京同好会というのがありましたので、そこで民謡、三味線を本格的にやり出して、もう20何年かやっていますけれども、そういう縁といたらおかしいですけれども、そういう感じで、まあやっています。うちのお袋も島では唄者でしてね、結婚式やら、そんな祝い事に呼ばれていきますけれども。いま82で四国にいますけれどもね。えー、そういったわけでございます。それとですね、お姉さんの方は、この前、東京の渋谷公会堂で奄美復帰50周年記念のコンサートがありまして、たぶん坪山先生も行かれたと思いますけれども、そのなかで喜界島代表として民謡をうたってもおります。えー、それからですね、武下流の同好会のメンバーのことを言いますけれども、みなさん、入ってくることは入ってくるんですね。ウタっていうのは、興味のある人は来るんですけど、それでもあまり長続きしないんですね。まあ、それはね、みんなプロになるわけではないですからね、プロって、まあそういう言い方悪いですけども。楽しみながらシマウタをうたっていこうやと、そういう感じでシマウタもやってもらえればね、一曲一曲シマウタを習っていけばいいと思います。あの、ぼくも挫折ありますよ。シマグチわからないものですからね。挫折をしながらもシマウタをいま現在やっているところでございます。えー、まあ難しいですよ、シマウタ。まあ、大先輩はね、もうね、すごくエネルギーがありますけれども、ぼくはまだ45から始めて4年くらいですけども、まだそんなにうたえる曲はございません。でも、ひとつひとつシマウタに関しては一生懸命勉強していきいたいなと、これからもですね、勉強していきいたいと思っています。

**梁川：**はい。あと先ほど、坪山さんと川本さんという大御所から、シマグチの重要性というのを再三指摘されておりますけれども、その辺をあまりつつかれると、泉さんの世代というのは、けっこうつらいものがあるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

**泉：**えー、そうですね、シマグチですね。それはあの、さっき川本先生も言われたように、ぼくの時代もですね、学校では方言を使わないようにとそういう時代でした。でも、普通友達と遊ぶときとかは、方言をしゃべっておりました。でも、なかなか島の民謡となるとですね、まあ、喜界島は別ですけども。でも喜界島の集落でも、ひとつ離れた集落になると、もう全然言葉づかいが違います。たぶん奄美本島もそうでしょう。ぼくはヒギャ節をうたっておりますが、喜界島のヒギャ節ってありますよね。ぼくも聴いたことないんですけども。あるんです。やっぱりね、それも掘り起こしながら、いまからそのシマグチをひとつくらい勉強しながらいきいたいと思っていますんですけども。分

からないときはぼくのお袋に訊くんですけれどもね。お袋も古仁屋系の訛りが出てきますけれども、そこがニュアンス違うんですね、喜界島とまたね。そこがまたバランスがどうもとれなくて、ウタもまあ聴いてもらえば分かりますけれどもね、喜界島の発音でうたっております。別にそれはそれでぼくはいいと思ってですね。えー、茂光は茂光のうたい方でいいとぼくは思っているんですけれども。えー、どうでしょう、みなさま（拍手）。ありがとうございます。はいはい。だからこう、あの方言というのは、ぼくもたまたま喜界島のそういう催し物に呼ばれていくときにですね、先輩からよく、「おい茂光、おまえもうシマグチ使わんと」と言われるんですよ。「シマグチつかいば、ウタもあのいいたっかなるよ」と言われるんですけれどもね、ぼくの家内も鹿児島ですから、なかなかシマグチを使う機会がないものですから。はい、友達と電話しても鹿児島弁でしゃべるとかね、いまはそういう状態です。

**梁川:**あと、泉さんは、いまは島ではなくて、鹿児島在住ということなんですけれども、鹿児島の人のシマウタに対する反応はいかがでしょう。それから、鹿児島でシマウタをやるのと島でやるのとは違いがあると思われませんか。違うところがあるとすれば、どういう点が違うと思われませんか。

**泉:**はい。いまぼくは鹿児島で島のウタをうたって活動しているわけなんですけれども、といっても、別に大それた活動はしていないんですよ。あの一、鹿児島のお客さんの反応はいいですよ。ぼくもあのシマウタだけでは鹿児島の方々に、あの受ける人は受けますが、受けない人にはまったく受けません。そのなかで、やっぱり鹿児島の民謡と言えば「おはら節」。「おはら節」を交えながら、シマウタをやりながら、そういう感じで、集まりとか、イベント会場とか、シマウタやりながら、「おはら節」は必ずやります。というのは、鹿児島の人間もおりますからね。そのなかで、お互いにやった方がいい場面もありますので、シマウタはまた最後に六調とかありますけれども、まあ、鹿児島の「おはら節」を交えながらいくんですけれど。一曲でもね、知っている唄がありましたら、みなさん乗ってくれるんです。まあ、活動というのはこんなもので、まあ、島ですとね、奄美の島に帰れば、なかなかこう、やっぱりつつつかれますね。「お前のウタになってない」とかね（笑）。それは、いいんですよ。まだまだいまから、別に先生になるわけでもないし、楽しんでやっているわけですから。「お前のウタおかしい」と大いに言われて結構です。それで私も壁にぶつかりながらやっていますけれども、それはそれでまた別な風に気持ちを切り替えてやっていますけれど。打たれても打たれても強い泉でございますので、ぜひよろしくお願ひします。（拍手）

**梁川:**最後に、このシンポジウムのタイトルは「しまうたの未来」ですけど、泉さんは始められたのも最近で、年齢的にもこれからあと何十年もうたっていられると思うんですけど、シマウタに対して、どんな展望をもっていらっしゃるでしょうか？

**泉:**えー、「しまうたの未来」ということですが、ぼくはですね、いまからまた、ずっとうたっていくわけなんですけれど、ぼくの頃はまだ島で民謡教室とかはなかった時代です。若い子が民謡をうたうなんて、いまで言う「ダサイ」ですか、そういう感じがあって、たまたまぼくの姉さんは学生の頃からシマウタをやっていましたけど、喜界島は親子ラジオがありますよね。各家庭にこんな時計みたいのがね。スピーカーが付いていまして、

そこからシマウタが流れてくるんですね。それでウタを聴きながら、ぼくの姉さんは、勉強しながら、それこそ歌遊びではないんですけども、口ずさんでウタを覚えていました。で、未来ということなんですけれども、若い子もこれからばんばんばん出てくるでしょう。喜界島もけっこう盛んで、(川畑)さおりちゃんの安田民謡教室ですとか、いっぱいおチビちゃんがあります。そういう子がぼんぼんぼん出てきましょう。まあ、それはそれでいいんです。若い子はね、出てきてもらって、人前でうたってもらって、それは勉強だと思っています。それからまたいまの若い子が、いろんなジャンルにチャレンジしていますけれども、それも大いにいいでしょう。それはやっぱり若いうちです。それにいっぱいうたって全国的にも奄美民謡を、シマウタを流行らせたわけですけれども、やっぱり最後は年取ってから、生の方の奄美のシマウタをうたってもらいたいとぼくは思っています。それで、みんな、ぼくもさおりも年取って、「やあ、さおり、歌遊びでもすんど」とそんな雰囲気で行きたいな、とぼくは常日頃おもっています。それにはまず、やっぱり勉強しなきゃ、みなさんの前で一曲でも多く聞いてもらえたらなと、ぼくは思っています。とてつもない話になりましたけれどもね、鹿児島にこの泉という人間がおるということで、みなさんどうぞ顔見知りをよろしく願います。どうも、ありがとうございました。

**梁川:** どうもありがとうございました。最後に、川畑さおりさんです。川畑さんは、いま唄者を輩出している世代である20代の代表として来ていただきました。お仲間にはメジャーデビューをされている方もいらっしゃるのですが、まずシマウタとの出会い、それからいま現在どんな活動をされているのか、ということからお聞きしたいと思います。

**川畑:** みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました喜界島出身の川畑さおりです。それではまず初めに、シマウタとの出会いをお話ししたいと思います。そうですね、喜界島というと毎年チャリティーショーが行われているんですが、そのチャリティーショーのなかで、私が通うことになる安田民謡教室のシマウタの演奏の発表会があったんですね。その発表を見たときが、私が習おうと思った瞬間なのですが、それがちょうど小学校3年生くらいでした。母と二人で見に行っただんですが、私が小さい頃はですね、こういった生活の場で、歌の掛け合いというのは特にされていなくてですね、喜界島では。シマウタに触れる機会もあまりなかったので、安田民謡教室のシマウタというのがとても新鮮に聞こえて、それで教室に入ることになるのですが、その触れることのないシマウタで、よくいまでも聞く話なんです、私の祖父が島一番の唄者で三味線弾きだったということはいまでも聞いています。であの、三味線を持って各家々に回って祝い、またあの遊びなどを行っていたと聞いていますが、私が小さい頃に亡くなってしまっていたので、祖父のシマウタというのは直接私は記憶にはないのですが、家族からはいま祖父が生きていたらすごく喜んだらうね、という話はよく聞かされています。こうして親族にも他にウタをやる人がいなかったにもかかわらず、周りの方々からも応援をいただいて、こうしてシマウタの活動を始めることになったわけです。で、私たちの島には八月踊りなどもあったのですが、シマウタの掛け合いというのは特になかったんで、私は安田民謡教室のウタにすごく魅力を感じました。私はそれまで、入るまでも歌にはとても興味をもっておりまして、その安田民謡教室の生徒さんが発表しているときも、まわりのお年寄りが涙を流して、そのシマウタというものを聴いているん

ですね。私あの小学校3年生で小さいながらに、どうしてシマウタを聴きながらまわりのお年寄りが涙を流しているのか、またこの世界にはこんなにも人の心を揺さぶる、感動を与えられる歌というのがあるのだということに、すごく感激しまして安田民謡教室にシマウタを、そして三味線を習いに通い始めました。で、よく子供の頃からシマウタをやっていると申しますと、両親に薦められたのですか、と質問を受けるのですが、私の場合はシマウタ自体に魅力を感じて、自分から習いに行ったとそのつどお答えしているのですが、ただ習い始めたときにはまわりの子供たち、まあ同級生や年代の近い方々なのですが、古い歌、昔の歌をうたっていると、とても珍しがられていました。「ステージに立つよ」と話をすると「えっ、三味線で出るの?」とびっくりされたこともあるんです。でも私は歌が大好きで、ただこうして楽しんでうたっていたのですが、ただ周りの子はたいてい新しい歌が好きで、シマウタはあまり興味がなかったのかなと思っています。いまは教室生もだんだん増えてきて、島の人たちもたくさん応援してくださるんですね。なので、いま私たちの頃の子供よりも、すごくシマウタをうたいやすい環境にいるのではないかと思います。そんな風にして、島にいるときからチャリティー活動、そして老人ホームの慰問、夏祭りなどいろいろたわせていただいているのですが、またあの奄美の方で毎年5月に行われています奄美民謡大賞ですね、にもあの小学校5年生の頃から毎年うたわせていただいております。で、高校を卒業しまして、鹿児島島に進学ということで出てきたわけですが、鹿児島に来てですね、島を離れてみて、またたくさんの方々に出会えて、いっそう活動の場が増えたと感じております。で、奄美関係のイベントなどが多いのですが、またあの福岡、熊本、東京、大阪などたくさんの方々から呼んでいただいて本当に嬉しく思っております。これまで13年間シマウタをうたってきて、とくに印象に残っているというのがですね、高校3年生のときに、鹿児島県青少年海外ふれあい事業というのがありまして、このときに中国に行きました。で、三線をもっていったらどこかでシマウタをうたえるのではないかと考えて、いちおう持って行ったんです。そしたらですね、中国の田舎の方に行ったときに、その田舎ってというのは、鶏とか豚とかそのへんに歩いているんですね。で、川で洗濯をしたり食器を洗ったりという村だったんですが、そこですごい面白い村だなと思ひましてね、私は三味線を広げたんですね。ちょうど広場みたいなところがあったので、そこで、うたい始めたら、まわりの方々が「なんだ、なんだ、なにごとだ」ってみなさん集まってこられて、で、楽しい曲をしますと、ぜんぜんウタの意味も知らないし言葉も通じないのに、踊り出してくださって、とても盛り上がり、たくさんの方とお知り合いになれたので、やはり音楽というのは国境を越えて伝わるものだとそのときに実感しました。また、もっともっとシマウタを好きになって、たくさんの方々から教えていただきたいと思うようにもなりました。

**梁川：**あの、川畑さんは教室でシマウタを習った、ここにいらっしゃる唄者の方のなかでは唯一の世代だと思うんですけども、その安田民謡教室について少し詳しく教えてくださいませんか？

**川畑：**はい、私が習い始めたときにはですね、古い歌とか昔の歌という印象が強く、子供たちもあまりなくて、多くて10人から15人という感じでした。いまではもう30人を越してたくさんいるのですが、もう卒業生も100人を越えるという話も聞いており

ます。あと、大人の方も何人かその当時は習ってしまっていて、いまもたくさんの方々が習いにいらしてあります。ふだんは練習時間は7時半から9時まで。で、その後が大人の時間です。週に2回ですが、大会前になりますと、もう毎日のように教室に通って練習してありました。練習方法というのが、楽譜というのが出ておりますが、私は本当にその楽譜を見てもなにも分からないです。安田民謡教室の練習というのが、先生の前に座って、見て聴いて、そのうたい方と同じようにするようにして習っていくんですが、また自分より年下になる小さい子供たちが入ってきた場合は、その子たちに一対一で向き合っただけで教える、見て聴いて教えるという形をとっております。で、全体練習になると、輪になってみんなで合唱をするという形をとります。で、まず先生が始めるのは「チューリップ」、あの「咲いた、咲いたチューリップの花が」というあの童謡ですが、それから練習を始めることになるんですね。そして「朝花節」「行きゅんにゃ加那」と行くんですが、あの教室ではですね、皆さんが知っているような一般的な曲を教えておりました、30から40曲ぐらいあると思うのですが、そうした曲を練習してありました。あの、歌詞の意味、由来などは先生がざーっと説明するのですが、また自分たちで図書館に行って本を見て調べたり、お年寄りの方に訊いて、こういった内容なんだという風に、自分たちで調べるといった形をとっています。生徒の大半は女の子なんですが、男の子も少しおまして、やっぱり変声期の時期になりますと、ウタを止めてしまっただけで、三味線一本になるという例が多くて、あのちょっと残念だなというのはあるのですが、いまはあの同世代の方でも男の方がうたっているのも見て、やっぱり励みになりますし、一緒に頑張ろうという気になります。それから、民謡教室の同世代で牧岡奈美さんがいるんですが、私たちが習い始めた頃は、私と奈美さんと二人で、敬老会とかに招待されて島中を回ってうたっていたわけですが、安田先生はいまでもその頃のテープを持って小さな録音機で聴いておまして、とても懐かしそうに「あなたたちにもこんな小さい頃があったんだよね」と思い出話を、私が島に帰るとしていただきます。

**梁川：**川畑さんはいま幼稚園の先生をなさっているわけですが、幼稚園でもシマウタを教えているらっしゃるようですが、教え子の皆さんの反応はどうですか？

**川畑：**そうですね。最初にシマウタを教えようと思ったときには、うまくいくかどうか心配でした。とくに、奄美の子供たちにシマウタを教えるのには抵抗がないのですけれど、本土の子供たちに教えるのには、正直言って自分でも大丈夫かとはじめは抵抗があったんですが、実際にやってみたら、思っていたより子供たちの反応がよかったので、教えてみようと思ったんです。子供たちはとくに坪山先生の「ワイド節」が好きみたいで、うたうと一緒に踊りだしたりするんですね。それで去年一通り教えて、夏祭りで発表会をさせたら、保護者の方の反応もとてもよくて、嬉しかったので、今年も教えています。そのほかにも、シマウタを教えてくださいというような要望はあちこちからいただきます。保護者の方の中にも教えてほしいという方がいらっしやいますし、他にもイベントで出会った方などからもそうした要望があるのですが、いまは忙しいので幼稚園以外では教えていません。

**梁川：**きょうのシンポジウムは「しまうたの未来」というタイトルなのですが、川畑さんは年齢的に言っても、まさに未来について語るにふさわしい方ではないかと思えます

が、これからどんなふうに関わっていきたいと思われませんか。

**川畑：**私は最近、ありがたいことに新民謡のCDを出させてもらいまして、その関係でよく新民謡をうたってくれと頼まれることがあり、大変嬉しく調子に乗ってうたっていますが……。私の中には、昔ながらのシマウタをきちんとうたっていきたいという思う気持ちの方がどちらかというと強いですね。いまヒット中のポップスアレンジでうたわれている方もいらして、また違った味を出してよいと思います。私もピアノの伴奏でうたったり、他の楽器ともセッションすることはたまにあります。時代の流れるにそうやって幅を広げながら伝えていく方法もあると思います。でも、やっぱり私は純なシマウタに惹かれるものがありますので、それらを大切にしながらこれからもうたっていこうと最近改めて思います。ですから、これからもっともっと先輩唄者の方々にいろいろと教えていただいて勉強していきたいと思っています。それから、とにかく島が大好きなので、できれば早く島に戻りたい。そして、島の子供たちにシマウタを通じて歴史を伝えていければと思っています。

**梁川：**皆さん、本当に貴重なお話を聞かせていただき、どうもありがとうございました。あの、もうかなり時間が予定よりオーバーしておりますが、せっかくの機会ですので、会場の皆さん方の質問をできるだけたくさん受けたいと思っております。どうぞ、どんどん質問していただければ幸いです。

**小川学夫：**えー、小川でございます。えー、先ほど民謡を世に出したと言われたのですが、これは誤解のないように。これは時代が求めていたひとつの流れでして、一個人がどうこうということではありませんが、たまたま私は、セントラル楽器でレコードづくりに携わることができたのと、それからあの、新聞社、南海日日にいたものですから、それで、いろんな催し物、いまの民謡大賞、その前の新人大会とかちょうどその発足に当たることができたということなのですが、考えてみれば、さっき坪山さんが、シマウタが悪くなったという部分にある意味でだいぶ荷担してきたんじゃないかと、反省が最近是非常に強くなってですね、あの、ある意味ではですね、そういった意味では、坪山さん自身がウタをだいぶ変えてきた（笑）（拍手）ということですね、これ、いい悪いの問題じゃなくて、皆さん方のようにですね、この非常に音楽的に才能のある人たちがうたったらですね、これ変わらないわけがないわけですね。そのまま真似だけで済むというわけではなくて、言葉もウタも変わるのが当たり前だと、私はその大原則はもっていますが、ま、質問になるんですが、やっぱりあのウタの要素、魅力というのはやっぱり音楽的なものと言葉の魅力があると思うんですね。言葉というのも、まあひとつひとつの発音というよりも、その中味で、とくにシマウタの場合は、掛け歌で相手にプロポーズしたり、振ったり、承諾したり、また皮肉を言ったりという面白さがほとんどだったと思うんですね、かつては。それがだんだんいまは音楽だけのもので、まあ、元とせを頂点として、音楽の魅力だけを追求してきたということ、なかったのか。ですから、言葉のやりとりの面白さですよ。これ、ちょっと前まで、私もよそ者ですけども、けっこう歌詞でからかわれたりですね、ちょっとした歌遊びで、「ああ、こういうことでいま自分はからかわれているんだな、この言葉で」とかですね、そういうことがあったんですが、ですから、ちょっと言葉のやりとりの魅力というのが忘れられてきたんじゃ

ないかなという件で、とくに坪山さんに、お訊ねしたいんですが。

**坪山：**はい、小川先生、私はあの、小川先生の影響でウタをしています（笑）（拍手）。あの、と申しますのは、うちの身内に小川先生と一緒にの男がいまして、そこで、私をシマウタに引っ張り出したのは、その男がウラでこう上手い具合にして小川先生とこうやってきてですね、それを知らずに、えー、第一回の民謡大会に出たんですけれども、そのときにすごく私は言葉、方言には自信があったんです。で、シマグチ、シマウタというのはシマグチでなければいけない。ところが、いまシマグチが下手になっている。これはもう皆さんご承知とは思いますが、えー、本来でしたら、昔の古い言葉、たとえば八月ウタの中にも、こう私たちの知らない語彙があるんですよ。いま私幾つかを調べていますけれども。おっしゃる通り、シマグチでうたわないと、シマウタは味がない。これはそうであろうと思います。ところが、いま若者にぜひシマグチでシマウタをなさいと言ったってですね、これは無理なんです。そこで、私は若者がシマウタにとっつきにくかったのもまず言葉だろうと思うんですよ。言葉とメロディーもそうですけれども。そこで、私はできるだけ若者に好かれるんじゃないかなと思うウタを、実際に5, 6曲, 7, 8曲作ったのですけれども、先ほどの「ワイド節」、川畑さんがおっしゃった「ワイド節」ですね。そういうことで、できるだけシマグチで唄わなければシマウタの味がない。これはもう原則です。はい。そこで、これを英語でうたう方もいらっしゃいます、それからヤマトグチ、標準語でうたう人もいます。ところが、まったく味はありません。というのは、やっぱり、島の習慣というか、島の生活というのはシマグチでなければ、あの、こう説得ができないということですね。ですから、これから何年できるか分かりませんが、できるだけシマグチでうたって、若者たちにつないで行こうと思います。よろしいですか、これで。

**小川：**いや、ちょっと、言葉のやりとりで、ウタの面白さ、魅力を伝えるということですが、今日、実はさっきちらっと聞いたのですが、坪山さん名瀬で歌掛けの何かがあるという……。

**坪山：**はい、はい、今日6時からあります（笑）。で、どうしても間に合いませんです。飛んでいくわけにも参りませんし。歌掛け、これは最も大事。小川先生は昔からこの大事さを問われていらっしゃいます。私も、この歌掛けがシマウタの原点だということをよく言っていますけれども、歌掛け、歌遊びのなかでの歌掛け、歌遊びとはちょっと違いますけれども、歌掛けというのは、たとえば自分の好きな人に、普通の会話ではどうしても話すことができませんから、そうするとメロディー、つまりシマウタに乗せて、相手をこう好きだったら「好きだ、お前が好きだから何日頃一緒になろう」とか、いろんな普段話せないことがウタでできる、ここが歌掛けの面白さではないかなと思います。それと自分の苦しい生活を訴えて、じゃあ助けようとか、そういうのもできる、自由にできる、このへんの面白さ、と思います。小川先生、よろしいでしょうか。（笑）

**小川：**それを……。

**坪山：**はい、やっていこうと思います（笑）。はい（拍手）。もうひとつ、小川先生につ

いて、面白いことがあります。よろしいでしょうか。

小川：なんですか。

坪山：私もあの一緒に歩いてきた道ですから。あの、小川先生という方は、人を褒める人じゃない（笑）。どんなによくうたっても、私がよくうたっても、ものすごく褒める人じゃない。ここで、小川先生が「まあ、いいんじゃない」とおっしゃれば上出来なんです（笑）。はい。で、私、「ワイド節」をつくったときに、えー、中村民郎という、療養所のレントゲンの先生が詞を書いてくれて、「坪山、おまえこれつくれ」と。で、私、あの闘牛というのはお金をもらっても見ようとは思っていなかった時代の話なんです。そこで、徳之島に小川先生も一緒に行ったときに、闘牛を見て、闘牛の雰囲気、そのまま、私、楽譜も書けないし、読めないんですが、頭の中にイメージをもって行って、あくる朝5分間でつくったのが「ワイド節」なんです。それを録音して、まず小川先生に聴いてもらうんです。そういうことですね、これがヒヤヒヤしながら、「先生、こういう歌をつくりました。ちょっと聴いてみてください」と言ったところが、「まあ、いいだろう」と（笑）。でも「人はうたえませんよ。人がうたえる歌じゃない。あんたがうたう歌だ。人がうたおうとしても難しくてうたえない」と。「これで、いいんじゃない、坪山さん」とこうおっしゃったもので。で、自信がつかまして、それからどんどんどんどんやって、いまはおかげさまでいまは全国でカラオケでもうたっていますよ。はい、私のところにその度に印税が2円きます（笑）。はい、ということで、シマグチの大事さを説きながら、これからもいろんなことをしていきたいと思います。よろしくお願いします。どうも。（拍手）

梁川：小川先生、よろしいでしょうか（笑）。せっかくの機会ですから、どんどん質問していただきたいのですけれども。

岡坂健太郎（共同通信社）：岡坂と申します。えーと、このいただいた青い紙にも書いてあるんですが、シマウタをベースとしつつも、たとえばロック風であったり、ジャズ風であったりっていうようにアレンジして曲を演奏して、さらにはメジャーデビューを夢見て、ポップの世界に向かうというような、そういう動きとか、やり方についてどういうふうにお考えになるか、できれば坪山さんと川畑さんにお伺いしたいんですけれども。

坪山：はい。えー、奄美のシマウタを、シマウタというよりほとんどポップスといってもいいと思いますが、あの歌の中にシマグチはありませんよね。はい。それで、できればシマグチでうたってくだされば、と思いますね。そして、これをシマウタだと決められたら大変で、シマウタはシマウタで、ポップスはポップスで、そうしてそういうメジャーになった若者たちが、シマウタをうたってごらんと言われたときに、「よっしゃ」と言って元に返ってうたえるような、そういう人になってほしいと思います。はい。よくこう、息継ぎとか、いろんなのがだいぶ違いますんで、それがもとでシマウタが元に返れないとか、返りにくいとか、そういうのがありますんで、その若者たちに「シマウタを」と言えば「よっしゃ」と言ってすぐうたえる、そういう人になって、そして、い

ろんな歌をやって欲しいと思います。

**川畑：**ありがとうございます。いま全国的にですね、元ちとせさんをはじめとして、シマウタから巣立った歌というのが評価されているんですが、私も同世代、若い世代として、やっぱりこうシマウタというのを、全国の皆さんに魅力を伝えていきたいと思っている一人なので、そういった先輩方のシマウタをベースにした歌というのが、日本中に広がって、皆さんに「はー、こういう歌もあるんだなー」というふうに聴いていただけるというのが、すごく嬉しく思っております。また、こうしたヒットのなかから、「シマウタというのはどういったものだろうか」というふうに他の県の方々も疑問を持たれると思うんですね、そういうところからまたシマウタ、奄美の方にこう入って行ってくだされば、という気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

**聴衆1：**どなたでもいいんですけど、教えてほしいんですけども、カサン唄というのは「笠利の唄」と理解してよろしいんでしょうかね。それとあの、ヒギヤ唄のこの「ヒギヤ」という意味が標準語で直すとどういう意味なのかを教えてくださいということ。それともうひとつ、武下和乎さんという方は瀬戸内のどこ集落の出身か、私全然知らないの、教えて欲しいということ。それともうひとつお願いは、年に一度くらいは、鹿児島市でもこの有名な唄者がコンサートを2、3時間くらい、生の演奏を聞かせてほしいなということ。名瀬とか東京方面では、有名な唄者たちが集まってコンサートを開いたというニュースなんか聞くと、うらやましくてたまらないものですから、ぜひそういうのを鹿児島市でも年に一回くらいはやって欲しいなという、これは希望です。以上です。

**坪山：**ありがとうございます。えー、カサン節というのは、あのいまですね、カサン節の基本というのは、南政五郎先生のウタであると。これカサン節では本当はありませんよ、昔のウタは違います。でも、そういうふうに着してあります。そして上村藤枝さん。ですから、名瀬地区を中心として、北の方をカサンとお考えになればよろしいかと思えます。はい。そしてヒギヤ節は、「ヒギヤ」というのは字を書けば、これは当て字かもしれないけれども、「東」と書きます。はい。「東」というのは、このへんは小川先生が最も詳しいんじゃないかと思えますが。

**小川：**詳しくはないですが、「東」は坪山さんの字検が西の方だとすれば、ヒギヤというのは確かに東です。ですけれども、いまはもう、一般的には南の方になっちゃったんですね。例の武下さんという人のウタにしても、もう南の方のウタですけれども、本来の言葉としては、西に対して東ですよ。ですから西は坪山さんの字検村とかあの辺ですよ。じゃないでしょうか。

**坪山：**はい。いまカサンにヒギヤと大きく分ければ2つなんです。そこでですね、もっと小さく分けられます。えー、カサン節を縦割りにして西と東に分ける。東の方が上村藤枝節、だいたい。西の方が政五郎節、南政五郎節。そしてヒギヤ節になりますと、ヒギヤにも西節というのがあります。焼内節。実は私なんかの集落ですけれども、あまり有名でない節なんですけれど。そして、西節が勝島徳郎さんという方がうたう、あの方が、瀬戸内町に久慈から西の方、加計呂麻もそうです、西の方、西節。それから東の方

をヒギヤといいますけれども、いまはもう西も東も一緒になってヒギヤというふうには。それが西古見という集落がありますよ、西古見。これは私の小さい頃の、3つ4つの頃のあれですけれども、それを西古見。名瀬市の市内にある小湊をヒギヤという。いまでも使っております。はい、大人たちはですね。ですから、小湊から住用のあたりを東とお考えになればと思います。そして、もうひとつ、武下さんの生まれ故郷ですけれども、加計呂麻の瀬戸内町の諸数という、ちょっと東側になりますけれども、小さな集落があります。いま家が15、6軒くらいありますけれども。向こうで生まれた方です。はい。あの辺は歌袋といわれる地域なので、よく唄者が出ております。そして、最後の質問は、唄者たちは名瀬でということですか、これは……。

**聴衆1**：いや、名瀬とか東京ではコンサートがあったと聞くんですが、鹿児島市でも年に一回くらいは、生の唄者の、上手な方のウタを聴きたいなと思って。

**坪山**：はあ、はあ。はい。鹿児島市はどの辺にお住まいですか。

**聴衆1**：田上です。

**坪山**：田上ですか。あの、年にですね、一回二回は主催者がいてやっております。新聞にもよく出ますので、これは新聞をごらんください。お願いします。はい。よろしいですか。ありがとうございます。

**梁川**：すみません。時間がありませんので、あとお一人ということをお願いします。

**聴衆2**：えー、時間がもうさし迫っているということですので、簡単に言います。実は私は喜界島出身です。きょうは泉茂光くん、それから川畑さおりさん、若い唄者が出て、本当に嬉しいです。ここが「しまうたの未来」ではないかな、と本当にそう思います。もうひとつですけれども、時代が変わればシマウタもやっぱり変わって行くだろうなと私は思います。いろんな条件があります。シマウタを取り巻く環境の変化がありますから、これはやむを得ないだろうなと思いますが、最後に「しまうたの未来」というのは、たとえばですね、私は徳之島節を聴くと鳥肌が立つのです。時代が見えてくるんですね。ですから、シマウタというのは遊びの要素もありますが、こういうような島の祖先の歩んできたものを、そのまま聞かせてくれる場面もあります。ですから、そういうことを考えますと、時代とともにシマウタが変わったとしても、その原点というか、先ほど小川先生が言葉とかおっしゃいましたけれども、そのウタの内容はしっかりと、やっぱり受け継いでいかないと、本来のものが失われていくのじゃないかな、と思います。ですから、まとめますと、シマウタが何だということをひとつにまとめる必要はないだろうと思います。ですから、時代の流れとともに変わるシマウタもあるでしょうし、それからまあ原点といいましょうか、坪山先生がほんとうのシマウタとおっしゃいましたが、あの「朝花節」ですね、初めてでした、あの本当の「朝花節」。ああいうものも消さないようにしていけば、「しまうたの未来」もあるのではないかな、とこういうふうに思います。以上です。(拍手)

梁川：坪山さん，何かコメントをお願いします。

坪山：ありがとうございます。やっぱり，古いウタがあって未来がある，これは当然ですが，古いウタといまうたわれているウタとの違いというのはたくさんあります。他のウタでもたくさん。そこで，たとえば「朝花節」では，私はよく小川先生にも，あの，お訊ねするんですけど，なかなか教えてくれないことですけども，あの「朝花節」の打ち出しに「ハレー」と「ヨハレ」と，そして「ヨハレ」と1回いう歌と，「ハレー」と4回いう歌とがありますね，同じ歌です。この辺をどうしてあんなふうになったんだろうかと思うときに，やっぱりこうステージによって変わってしまったと，私は思います。いかがですか，先生。

小川：やはり言葉というものは変わるもので，やっぱりその場で変わるんで。やっぱり「ハレー」というのは，私がお年寄りから聞いたのは，昔掛け歌で「ハレー」と言いながら次の歌詞を考えた，ということらしいです。で，その「ハレー」が「ヨハレ」になったり，長かったり短かったりは，それはもう個人の，個人というか地域とかのものですし。

坪山：ありがとうございます。たとえば，ヒギヤ節のなかで「ヨハレ」と言うのと，武下さんが「ハレー」と三回も四回も言うことを考えますと，昔の人は即興が上手かった，と考えられるんですね。

小川：もう，即興が命だったということ。

坪山：いまだったら「ハレー」を何回も言わないといけません（笑）。いや，あの面白く話せばそういうことになる。ですから歌遊びのなかで即興で歌遊びをするときには，できるだけ「ハレー」というのを使って下さい。

梁川：どうも，活発な質疑応答ありがとうございました。時間ですので，質問はもうこのくらいにして，最後に中原ゆかり先生にこのシンポジウム全体についてコメントをいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

## コメント

中原：失礼ながら、短くコメントをさせていただきます。今日は活発なご意見、質疑応答、それからいろんな方の生の声をきかせていただき、大変ありがとうございました。簡単にまとめさせていただきますと、最初に私がシマウタの全体的な変化を報告させていただきまして、それから西元さんの方から、大笠利の八月踊りの伝承状況、地域ぐるみで若い子を育てている状況、それから郷友会と地元との交流のお話をいただきました。それから、梁川先生からブルターニュの民謡のお話をいただきまして、まあ、政治事情が違うということもあって、政府の保護や経済的な援助があったりですとか、録音資料を体系的に集めているという興味深い話がありました。ブルターニュはケルト音楽ということで、外から非常に注目されている地域です。私の知る限りでは、沖縄ポップスが好きな若者たちのなかには、ケルト・ファンが多いのですけれども、会場のなかにもケルト・ファンがいらっしゃることと思います。奄美の唄も、朝崎（郁恵）さんの歌がワールドミュージックのヒットチャートで一位だったということもありまして、外からワールドミュージックとしてみられること、また舞台化の話というのは世界的に共通するというお話をいただきました。

ラウンドテーブルの方では、坪山さんの方から、実演と共に、「シマグチを大切にしてほしい」「歌遊びを残してほしい」「いろんなウタを残してほしい」「いま子供たちに教えているが、学校教育にももっと取り入れてほしい」というお話がありました。

また川本さんの方から、徳之島の出身で、徳之島節の民謡を歌っていらっしゃったのですが、大阪に行かれて武下節も覚えられたとのことでした。その後鹿児島にいらして、小川先生とか坪山さんと出会われて、いろんな方との出会いのなかで、いろいろウタを習っていらっしゃる、そして鹿児島の公民館でシマウタを教えていらっしゃいます。これからは島出身の子供たちや鹿児島の子供たちにもシマウタをうたって欲しいという熱いお話がありました。

それから40代の唄い手で、喜界島出身の泉さんから、「最近習い始めて一生懸命やりたい」という非常に面白い話がありました。こちらは、45歳になって急にシマウタがなんだか好きになってきた。とっってもシマウタを大事にしたいと思われているということで、いまは武下流の同好会で、グループのなかで三味線を習い、シマグチは使えないということなのですが、使える人はまだたくさんいる、と。グループのところに行ったら、なるべくシマグチが使えるようになりたい、という非常に興味深いお話でした。

若手で人気の川畑さんから、子供の時から安田民謡教室で習ってきた。で、自然な歌遊びで覚えたという世代ではないのですけれども、民謡教室で習うことによって、島の宝であるということ、民謡が非常に重要だと、皆さんが感激するということが、シマウタを知りたくなったということです。シマウタから新民謡に至るまで活躍していらっしゃって、コンクールにも出ていらっしゃる。で、面白いことに、同じ鹿児島県の民謡ということで、勤務先の幼稚園で教えていらっしゃって、子供さんたちに非常に楽しく習ってもらっているというお話を聞きました。また川畑さんは、歌遊びで覚えた世代ではないんですが、教室で習うこと、コンクールに出ること、幼稚園で教えることとかを通じて、それから中国の方にも行かれた話からは、シマウタのグローバルな面が窺えました。つまり言葉では分からない通じないということもありますけれども、ある程度のところで音楽があれば交流できるということを体験していらっしゃいます。奄美にはシ

マウタがあるということをしごく誇りに思っている、とそういうお話だったと思います。

その後もいろいろ質疑応答として、皆さんの意見を幾つも聞かせていただきました。とくに「シマウタをひとつでまとめる必要はない。いろんなものを残していくべきだ」という御発言は、今の時代になって皆さんが思っていることだと思います。私もそれに大変共感いたしました。そこで、今日のテーマは「しまうたの未来」ということですので、私の方からひとこと感想を述べさせていただきますと、まずブルターニュの例にもありましたように、体系的に音を集めるということを考えてもいいかな、と思います。もちろん、今のシマウタの伝承がある程度満足のいくようにいっているということで非常にいいことなのですが、過去のものを残しておくということも、研究の立場からは重要かと思えます。ブルターニュの方で、体系的に集められた例を参考にし、それから私の知る限りでは、最近ブラジルで録音収集に力を入れておられて、古いSPレコードから写真からCD-ROMで発売されていて、全部パソコンで見たり聴いたりできるようになっています。シマウタの場合は幸いいろんな方が録音なさっているということで、資料もたくさんあると思います。歌掛けの時代からポップスの時代まで来たということで、そろそろ録音資料を体系的に集める必要があるのではないか、という感想をもちました。また、普及活動というと教室ばかりかと思っておりましたが、大笠利で地域ぐるみで若い人を育てようという例があるというご報告をいただきました。そういった現状報告が、シマウタの場合にはまだできていないというところがあります。たとえば、大阪、東京、鹿児島県の郷友会の状況など、まずは今何をしているのかということをもうちょっと調べることが必要かと思えます。先ほど鹿児島でどこに行けば奄美の民謡が聴けるのかという質問がフロアからでました。鹿児島でも奄美の民謡を聴くことのできる催しものはあるのですが、あってもなかなか知ることができないということなのでしょう。いろんなそういう現在の状況というのを調べてですね、シマウタ・ハンドブックのようなもの、つまり奄美の方、あるいは奄美ファンの方がそれを見たらサッと奄美のシマウタを聴きに行けるようなものを、奄美の方、あるいは奄美に関係した方、研究者が協力して作ったら便利だろうと思います。よりいっそうの調査と公開、録音資料の体系的な蓄積と公開がこれからの課題でしょう。

また、担い手の方々からの今日のお話には、子供たちに教え、教室で教え、幼稚園や学校で教えることの重要性をご指摘いただきました。あるいは泉さんのお話にありましたように、教室にいかなくても、同じような人たちが集まったグループのなかで、彼の場合は武下流というところで習うことができます。そしてグループということでウタを通じて親しくなる。で、親しくなって、何でもだんだん言えるようになって、シマグチも少し覚える。またウタも覚える。で、そういうグループがあれば、ときどき島にも行くことになります。そういう教室やグループでウタをつうじて仲のいい友達をつくっていくということが、とくに郷友会などではとても重要なんじゃないかと思いました。で、ちょっと違う例ですけど、私が最近調査しているハワイの日系人は、日本語はもう話さず英語のみの世代になっています。そのなかでわずかに日本語を話す人というのは、大学で日本語を習った人のほかに、だいたい盆踊りや日本の歌謡曲を教室やグループで習っている人なんですね。最初は日本語をローマ字で読むぐらいのところまでやって、グループに通いながら年配の二世の方等と日本語と英語とチャンポンで話すようになっていく。そうするうちに50歳位になったら、そのグループにいたから日本語が片言ながら少しできるようになったという方にたくさんお会いします。このように好きでやって

いることがあってグループのなかで言葉を覚えていくということは可能ですし、シマウタに関していえばシマグチを話せる人はまだ山のようにいらっしゃるでしょう。可能性としてですね、教室、それからグループ、地域ぐるみの活動などもどんどん考えていってよいと思います。

また最近のポップスについても、いろんな意見がありますが、まあ、これからどうなるかというのがまた楽しみなところだろうと思います。私の住んでいる愛媛では、奄美出身者もいませんし、私が十年前に大学に赴任したときは奄美といってもほとんど誰も知らないような状況でした。奄美のシマウタというのを授業でやりましたら、奄美がどこにあるかようやく分かり、数名が興味をもつという状況でした。それがあの、この4、5年の間に随分と状況が変わりました。私が奄美のシマウタについて授業でふれると、もっと知りたいという学生ができました。それだけではなく、一人か二人は「行きゅんにゃ加那」などをうたえるのですね。というのは元ちとせのファンとしてCDを買って、そのままセントラルの方にアクセスして彼女のシマウタのCDも買う。そして、聴いているうちに数曲覚えるというわけです。つまり18、9の大学生がJポップの延長にシマウタをうたうという、なんか非常に不思議な状況が出てきて、奄美と縁の薄い場所だけに面白く思っております。また愛媛では、朝崎さんの歌がヒットしたということで、ワールドミュージックが好きな20代の人たちがときどき集まって朝崎さんのCDを聞き、それでシマウタを習っています。彼らはときどき奄美にも行っています。これから本当に世界中にあるワールドミュージックのひとつとして、シマウタが役割をもってくるという時代がくるのか、あるいはまた今だけのブームで終わるのか、ちょっと分からないんですが、新しい傾向として見ていきたいと思っています。また坪山さんのお話にもありましたように、歌掛けをこれから復活させる、保存するという動きも奄美ではあるようです。また言葉の楽しみということ、シマグチというものが重要だと思っていられる方もたくさんいらっしゃると思います。

今後のシマウタをどうしていくかという問題は、歌手や研究者、イベントの企画者等、いろんな立場でシマウタに関わっている人たちが話し合う場所が必要だと思います。とりあえず今日はとってよい機会になったと思うので、また皆さんの意見をですね、きょうまだ話し切れない方がたくさんいらっしゃると思いますので、きょう終わったら懇親会に行ってくださいましてですね、「新穂花」の方でたくさんお話しいただきまして、Eメールアドレスとかの交換をいたしましてですね、ぜひこれから情報交換の場が増えればよいなと思っています。私からのコメントはここまでにさせていただきます。で、今日はせっかく東京から末岡さんがいらっしゃってございまして、東京の郷友会の状況を調べていらっしゃいますので、ちょっとお話しいただきたいと思っています。それから最後に、先ほど歌掛けの話をしていらっしゃいましたが、小川先生からもひとつコメントをお願いしたいと思います。

**末岡三穂子（民俗文化研究所）：**末岡と申します。よろしく申し上げます。いま、郷友会の話ということだったんですけども、実は今年の4月までに東京のシマウタ教室について調べさせてもらいました。私が把握したのは7つ。もっといっぱいあるかもしれませんが、一応7つの教室を回りにまして、いまシマウタが東京でどのように伝承されているかということ調べてみました。そうしますと、やっぱり教室によってすごく特徴がありまして、本当に奄美の出身者の方だけが稽古している教室もあれば、開かれた教

室と言いましょか、いま、インターネットの普及によりまして、いまインターネットで検索して、奄美と全然関係のない方たちがシマウタ教室に入るという状況が出てきました。で、結論から言いますと、2002年に元ちとせさんがメジャーデビューされて以降ですね、そういう興味をもった人が増えて、インターネットで検索して、とくに若い人たちが習いたいという状況が多くありました。2002年以前になりますと、奄美の関係者、奄美の出身者、あるいは二世三世以外はほとんど習っていない、皆無に近い状態だったんですけど、2002年以降になりますと、顕著に奄美以外の出身の方が習い始めたということがよく分かりました。それで、いまシマウタの伝承について、歌掛けという高度なテクニックによる伝承の話があったんですけども、やはり東京は奄美から随分遠いなという印象で、そういう高度なテクニックの伝承は難しい。ただ、メロディーとか、そういうあの、奄美の音楽を聴いて感動した人たちが、奄美のメロディーを弾いたりうたったりして、まあ真似事でやっとならぬシマウタでうたう、本当に発音もままたらぬ形であらう。そういう状況でやっている教室が多いです。それで、いままでは郷友会とか、そういう奄美の出身者の人たちが集まってやる教室が多かったんですけども、いまそういうメディアの発達でいろんな人たちが入れるという、奄美のシマウタに触れる機会が増えてきたということが、いまの東京の特徴だと思います。それで、あと鹿児島ではそうではないんですけども、やっぱり東京では、先ほど話に出ましたアレンジのシマウタのライブというのがすごく多く開かれているんですね。それを聴いて感動している人が多いんですけども、私は聴いていてこれでいいのかなという懸念があって、これがシマウタだと思ってもらっては困るかなという心配を東京でしているところです。やっぱり、東京におけるシマウタの感覚と、鹿児島で受ける感覚というのは、やはりちょっとかけ離れているなという印象をもちました。

**中原：**どうも興味深いお話ありがとうございます。では、小川先生に最後にひと言お願いします。

**小川：**いまの歌掛けが高度だということの意味なんですけれども、いまの感覚では高度なんですけれども、結局、日常的な言葉にメロディーをつけて、メロディーというよりも言葉が主で、そこにメロディーをつけてうたうというのが基本で、いまはどちらかという歌詞があって、その歌詞をどう感情移入してうたおうかと、それで節に工夫をして、ある意味ではいまの方が高度かもしれないですね。ま、というようなことは別として、短く締めます。最初に中原さんが、奄美の人たちは全部自分の好みとかなにかはつきり個々人がもっているということなんですけれども、実はこれウタの好みとかそれだけじゃなくて、奄美の人は本当にシマウタに関する意見がみんな違います。そういう伝承の仕方。ですから、きょうも、シマウタ好きな方というのは、みんな持論を、理屈を聞きに来て、みんな十分楽しんだんじゃないかと思いますが、またこういう機会を作っていただいて、みんなでわいわい議論したらいかがでしょうか、ということで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

**中原：**どうもありがとうございました。

(シンポジウムではこの後、唄者による小コンサートが行われた。曲目は坪山氏が「綾<sup>あや</sup>

はぶら 蝶], 川本氏が「三京みきょうの後くし」, 泉氏が「糸繰り節」, 川畑氏が「むちゃ加那節」で, 最後に全員で「六調」が演奏された。) )